

Interpersonal distance as a function of sex, age, attraction and intimacy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4002

対人距離に関する性・年齢・魅力・親密度の要因の検討

池上貴美子 喜多由香理*

Interpersonal distance as a function of sex, age, attraction and intimacy

Kimiko IKEGAMI, Yukari KITA

我々は家族や友人など様々な人と関わりながら社会の中で生きている。そのような人と相互作用する日常場面において、我々は様々な距離に自分の位置を置いている。例えば、他人が遠くにいるときはほとんどその存在は気にならないが、ある距離まで相手が近づいてくると急に落ち着かなくなったり、作業に集中できなくなったりする。これは無意識のうちに作り出した自分自身の領域に、他者が侵入してきたためであると考えられている(渋谷, 1990)。

青野(2003)によれば、このような個人が各々もっている領域は、個人空間(personal space)あるいは対人距離(interpersonal distance)と呼ばれ、これらに影響を及ぼす様々な要因が従来より検討されてきた。個人空間は、非言語コミュニケーションの一つとして、良好な人間関係を築く手段として重要視されてきた。

それでは大学生において個人空間はどのように構成されているのであろうか。男子学生と女子学生では、個人空間は相手の年齢や魅力度や親密度や性によって異なるのであろうか。青年期における個人空間を規定する様々な要因を検討することは、興味深いテーマの一つと考えられる。

問題

個人空間に関する研究の歴史

田中(1973)は、人間の行動空間や物理的環境を含めた空間に関する研究が3つの流れに収斂されると概観している。はじめに1930年代に精

神病理学の分野で Binswanger, L., Straus, E.らによる「体験的空間」の概念が導入され、日常生活においては我々が物理学や数学などで論じられる空間とは異なった性質の空間に生きていることが指摘された。次に1950年代後半から1960年代前半にかけて文化人類学の分野で Hall, E. T. が起こした流れがある。Hall は比較行動学における動物のなわばりや混み合いからヒントを得て、人間の空間行動がコミュニケーションの道具として利用されること、この空間の利用の仕方が文化により異なることを見出した。最後に1960年代、心理学の分野で Sommer, R. が起こした流れにより今日の研究の基盤が作られたとされる。彼は小集団における着席位置が、個人の行動を規定したり、また目的達成に選択されることを示す中で、人間の空間確保やプライバシーと物理環境との関係を取り扱う環境心理学への橋渡しをしたとされる(田中, 1973)。

個人空間・対人距離の定義

田中(1973)によれば Sommer(1959)は、精神病院において、故意に患者に接近して座ると、多くの場合患者はすぐにその場から立ち去ってしまうことを観察し、このような現象を個人空間(personal space)という語で説明した。この無意識のうちに作り出されたそれぞれの状況に適した目に見えない空間、すなわち個人空間という概念には次に示す様々な定義がなされてきた。Sommer(1959)は「個人空間とは他者が侵入することができないような、個人の身体を取り巻く

目に見えない境界線で囲まれた領域であり、周囲の状況などにより伸縮する個人を取り巻く気泡のようなもの」とした。この領域に侵入しようとする者があると強い情動が引き起こされることから、個人空間は個人の内面との関連でとらえられている。Dosey & Meisels(1969)は「個人空間は庇護の目的のために利用される身体緩衝帯であり、また身体を傷つける恐れから自己を守り、自尊心を庇護するために使われている」と定義した。Little(1965)は「他者との相互交渉が大部分その中で起こるような、直接個人を取り巻いている領域」と定義し、相手との心理的距離が小さければ対人場面における相手との距離も小さくなると指摘した。Hayduk(1978)は、個人空間を「自分の周りにあって、他者が侵入すると不快感が起こる領域」と内的次元を入れて定義している(青野,2003)。このように各研究者の立つ視点により、後述する規定因の検討が行われることとなる。

個人空間の大きさについて、Hall(1966)は、日常生活をする上で使われる距離帯が大きく分けて4種類あるとし、またそれぞれの距離帯を近接相と遠方相に分けている。その第1は密接距離(0~45 cm)で、そのうちの近接相は、言葉がかわすよりも身体に触れたり体温を感じたりする距離であり、重要なコミュニケーションを行なうことができるものである。遠方相は手で相手の体に触れることができる距離であり、親しくない人とこの距離になると不快感が生じる。第2は個体距離(45 cm~1.3m)で、近接相は、自分の手や足を使って相手に触れたりできる限界の距離で、きわめて親しい人同士が使用できる距離とされる。遠方相は身体によって相手を支配する限界の距離で、相手の表情の細かいところまで判断することができるため、個人的な関心事を話したりする際に用いられる。第3は社会距離(1.3m~3.75m)で、その近接相は、相手に触れることも相手の顔の微妙な変化に気づくことのできない距離で、仕事上の仲間との間で使用される。遠方相では、相手の姿全体が見

やすくなる。形式ばった人間関係において使われている。この距離は他人の存在があまり気にならない距離であるとされ、作業に集中することができる。第4は公衆距離(3.75m~)であり、近接相においては相手の様子が分からなくなり個人的な関係が成立しにくくなるとされる。また無意識にその場から逃げ出したいという逃走反応が起こりやすい距離とされる。遠方相はさらに言葉の細かいニュアンスが伝わりにくく、個人的な交渉が困難であるとされる。身振りや姿勢を利用したコミュニケーションが行なわれる。これらは属する社会や文化によって異なるが、8つの距離帯は存在するとされる(青野,2003)。

個人空間という用語の他に、対人距離という用語がある。青野(2003)によれば対人距離は二者間の一次的な距離を表すのに対して、個人空間は個人が確保する二次的な広がりをもつ空間を表すとされ、個人空間は、その人のまわりを取り巻いているあらゆる方向の対人距離の集合とみなすことができる。本研究では青野に基づき、実験上より操作が可能な対人距離を扱うこととする。

対人距離の規定因

対人距離に関する研究は1960年代から1980年代にかけて盛んに行なわれ、それ以降は減少傾向にあったが、最近では対人距離の応用的研究も散見されるようになった。これまで対人距離に影響を与える要因が、数々検討されてきたが、青野(2003)に基づき対人距離を規定するいくつかの要因について述べる。

<個人的要因>

・年齢の要因

子どもから大人へと成長する過程において対人距離は拡大する傾向があり、女性に比べ男性の方がその変化は著しいとされる(Hayduk, 1978)。それは人の子が発達に従って親から離れて自立への道を進むからであり、また男性は社会から独立をより期待されるためであると考え

られている。

・性の要因

対人距離の性の要因については多くの研究がなされてきた。青野によればその結果は一貫していないが、女性は男性よりも対人距離が小さいとの報告が多い(Hartnett, Bailey & Gibson, 1970 など)。一般に男性-男性間の距離が他の組合せより大きいという結果はほぼ一致している(Gifford, 1982 など)。性・人種・年齢に同時に焦点を当てた研究では、性の要因は人種や年齢、相手の性との交互作用として対人距離に影響を与え(Severy, Forsyth & Wagner, 1979)、性の要因それ自体では対人距離を変化させる有力な決定要因にはならないとされている(Gifford, 1997)。

<社会的環境の要因>

相互作用を行なう場面における社会的関係についての要因では、相手との関係が親密で協力的であるほど対人距離は小さくなる(Little, 1965; Sommer, 1965)。また地位に関しては、地位が対等であるほど対人距離は小さいという結果が得られている(Gifford, 1982)。

<物理的環境の要因>

物理的環境も対人距離に影響を及ぼすことが知られており、使用できる空間が小さいと感じる時、対人距離は大きくなる傾向がある(Daves & Swaffer, 1971)。また長時間他者との接触が無かった場合に対人距離は小さくなる(Worchel, 1986)。

<人種・文化の要因>

人種、民族、文化差が対人距離に与える影響も検討されているが、結果は一致していない。人種や民族の差がそのまま対人距離に影響しているのではなく、宗教や使用言語などが媒介している文化差の存在があるのではないかと唆されている。

<発達の要因>

発達の要因の分析は今川(2000)や青野(1979)に示されてきた。青野は、様々な社会的経験を通して空間行動が獲得されるとの観点から、小学3年生、5年生、中学2年生、大学生を被験

者に対人距離についての実験を行なった。各年齢段階から、女子ペア・男子ペア・異性ペアが10ペアずつ、合計30ペアが選ばれた。各ペアには、どれくらいの演技力があるかを調べるものと教示し、2人の友達が会話をしている場面で、その2人が仲の良い友達の場合と、仲の悪い友達の場合の2通りのお芝居をしてもらった。実験者はハーフミラーを通して、各ペアの練習中の風景を写真撮影し(20秒毎に10回)その写真から対人距離を割り出した。その結果同性ペアの対人距離は年齢と共に大きくなることが示された。対人距離の身長比を算出したところ、身長比はほぼ一定であることから、対人距離の増大は身長の伸びによって解釈できた。一方、異性ペアの対人距離は中学2年で最大となり、小学5年生でもほぼ同じ距離であった。つまり前思春期から思春期にかけて異性間の距離は大きくなることが示され、異性に対して敵意を示す時期であるためと推察されている。また好意度も対人距離に影響を及ぼしており、好意的関係での対人距離は非好意的関係での対人距離より有意に小さく、全ての学年を通して対人感情を伝達する際に対人距離を利用していることが示された。性差に関しては、男子ペアは女子ペアよりも対人距離は大きい傾向が伺えたこの研究では、同性ペアでは年齢が上がるにつれ対人距離は大きくなるが、異性ペアでは思春期を頂点とする曲線的な変化を示すことが見出され、年齢と性の要因が単独で影響するのではなく、相互に影響し合うことが示された。

以上のように、対人距離に影響を及ぼす要因には、性・年齢・親密度・地位・物理的環境・人種・文化などがあげられる。発達の的には、子どもから大人へ成長するにつれ対人距離は増大していくが、性差が発達のどの過程で現われるのかについては明確な結果が得られていない。本研究では、大学生を対象に、対人距離に及ぼす被験者の性の要因、相手の年齢の要因、相手との親密度の要因、相手の魅力度の要因を、相手の性の要因と共に検討することとする。

対人距離の測定について

対人距離の測定には、主に自然観察、実験室実験、投影法の3つの方法が用いられてきた。それぞれの方法で得られた結果の相関については高いものも低いものもあり一貫していない(Hayduk,1983)。またそれぞれの方法には長所と短所があることが指摘されている(青野,2003)。

自然観察法は、自然な場面における対人距離を測定するものであり、対人距離を個人差や場面状況の関数としている。実際の日常場面での相手との距離を測定するため、最も信頼性が高いとされている。しかしながら自然場面での観察であるため、プライベートな部分まで踏み込んで観察することはできない。したがって、研究の目的が制限されるという短所がある。

実験室実験は、実験条件を操作し、被験者が相手にどれだけ接近することができるか、または相手に接近されることができるかという実験を行ない、その距離を測定するものである。相手が実際に目の前にいるため、被験者は実験ではあるが現実の場面とイメージしやすく、距離も正確に測ることができる。しかしながら相手の詳しい特性まで統制する事は困難であると予想される。また多量のデータを集積するには長時間を要するという難しさがある。

投影法は、ミニチュアの人物や図形・絵などを人物に見立て、相手と会話するときに最もふさわしいと思われる位置を測定するものである。実験自体は比較的簡単であり、また複数の要因の関係を調べたい場合は、投影法が最も相手の特性を統制しやすく、有効な方法であるといえる。実生活上の対人距離とのギャップが存在することがあるため、物理的な対人距離を測定しているのではなく、心理的な対人距離を測定しているという指摘もある(Gifford,1997)。3方法の中では最も接近しやすい方法といえる。

投影法を用いた研究

青野(2003)は、コンピュータ・シミュレーション実験により対人距離を測定した。被験者は一般企業に勤務する男女従業員で、約半数が管理

職であった。コンピュータの画面上に、自分を表す人物図形と相手を表す図形が表示されており、その二者間の距離は200mmであった。相手人物は6人物(女性上司・女性同僚・女性部下・男性上司・男性同僚・男性部下)を設定した。そして相手に接近する(接近される)場面を想定し、それ以上接近する(接近される)と気詰まりだと感じる位置を判断させた。その結果、被験者の性の主効果は有意ではなく、相手の性の主効果、被験者の性と相手の性の交互作用が有意であった。男性も女性も、相手が同性である場合よりも異性である場合のほうが、より大きな対人距離をとった。また被験者の地位は対人距離に有意な効果をもたなかったが、相手の地位が対人距離に影響を与える可能性が示唆され、相手の性によって距離が異なることが見出された。この結果は性差を否定するものではあったが、相手の性や地位により対人距離が変化することが示された。

また北川(1998)は、教室の座席行動を個人空間の観点から検討し、個人空間の大きさをシミュレーション場面における対象人物への対人距離として測定するために、Dykman & Reis(1979)を参考に対人距離テストを作成している。親和性の異なる3人物を設定し、被験者に各人物と対面する場面を描いた平面図を示し、その人物と面談する場合に最も適当と思う距離のところに○印をつけるよう求めた。記入された○印から人物の頭部の中心までの距離を測定し、それを対人距離とした。この研究では、教室の前に座るほど、そして対象人物との親近性が高いほど対人距離は小さいという結果になり、これは教師との距離の調整の反映であることが示唆された。

そこで本研究では、より多数の被験者についてのデータを得ることを目的として、投影法を採用することとし、北川の対人距離テストを用いて異なる人物への対人距離を測定する。

目 的

本研究では、大学生を対象として、対人距離を投影法を用いて測定する。その際、対人距離に影響を及ぼすと考えられるいくつかの要因について対象となる人物を16人設定し分析する。まず、被験者の性の要因について、欧米の研究では女性は男性よりも対人距離を小さくすると結果が多いが、この性の要因は単独で効果をもつわけではなく、他の要因によって性差の現われ方は異なることが示唆されている。そこで「被験者の性」の要因以外に「相手の年齢」、「相手の魅力度」、「相手との親密度」の要因が「相手の性」と関連しながら対人距離にどのような影響を及ぼすのかを検討する。

方 法

被験者 石川県下の4年生大学の学部学生 65名を調査対象とした

対人距離の測定 北川(1998)の用いた投影法による対人距離テストを行い、後記の異なる16人物への対人距離を測定した。大学内の講義室を実験室として、集団実験を行なった。それぞれの人物と対面する場面を描いたA4版用紙の平面図16枚と表紙と例からなる冊子を被験者に配った。そして次のような教示を与えた。「次のページからは、あなたともう一人の人物が描かれています。その人物と会話する時に最も適当だと思う距離に○印をつけてください。」また、○印は被験者の頭部を表していること、○印は描かれている人物と同じ大きさで、点線上に描くことを求めた。被験者と人物の頭部は直径20mmの円で描かれており、その頭部と頭部の間隔距離は200mmであった。平面図に記入された○印から人物の頭部の中心までの距離を測定した。これを対人距離スコア(IPD; interpersonal distance score, 単位mm)と呼ぶことにする。

対象人物

魅力度 魅力的な人(同性, 異性)
魅力的でない人(同性, 異性)
親密度 親友(同性) 恋人(異性)

大学生(同性, 異性)
年齢 老人(男, 女)
見知らぬ中年男性, 見知らぬ中年女性
子ども(男の子, 女の子)
身近な人 父親(または父親と同等の人)
母親(または母親と同等の人)
(既述) 親友, 恋人
これらの16人物はランダム順に配列された。
実験時期 2004年11月

結 果

【相手の年齢の要因】

16人物のうち、老人(男)、老人(女)、見知らぬ中年男性、見知らぬ中年女性、子ども(男の子)、子ども(女の子)への対人距離スコアを測定しこれらの平均値について、被験者の性(男, 女)×相手の年齢(中年, 老人, 子ども)×相手の性別(男, 女)の3要因分散分析を行なった。その結果、被験者の性($F(1,63)=10.747, p<.001$)、相手の年齢($F(2,126)=95.704, p<.001$)、相手の性別($F(1,63)=9.260, p<.003$)の主効果、被験者の性と相手の性別の交互作用($F(1,63)=17.556, p<.0001$)、相手の年齢と相手の性別の交互作用($F(2,126)=9.063, p<.001$)が有意であった。単純主効果の検定の結果、被験者の性差は、相手の性別が男($F(1,126)=3.473, p<.10$)でも女($F(1,126)=19.257, p<.001$)でも有意にみられ、また女性被験者においてのみ相手の性による有意差($F(1,63)=26.158, p<.001$)があった。また相手の年齢差は相手が男性でも女性でも有意で(各 $F(2,252)=101.768, p<.001$; $F(2,252)=54.645, p<.001$)、中年と相手の性別の単純主効果も有意であった($F(1,189)=24.728, p<.001$)。Ryan法の多重比較より、相手が男性でも女性でも、中年と老人・子ども、老人と子ども間に有意差があった(中年>老人>子ども)。被験者の性差は老人、中年、子ども全ての年齢において有意であり、女性被験者は男性被験者より対人距離が近かった。男性被験者は相手の性別による有意差がなかったが、女性被験者においては相手の性別に差がみられ、女性の相手

に対しての距離が男性の相手より距離が近かった (Fig.1-1, Fig.1-2 参照)。

【魅力の要因】

魅力的な人(同性,異性)、魅力的でない人(同性,異性)への対人距離スコアの平均値について被験者の性(男,女)×相手の魅力度(有,無)×相手の性別(同性,異性)の3要因分散分析を行なった。その結果魅力度の主効果($F(1,63)=43.602, p<.001$),

相手の性の主効果($F(1,63)=17.681, p<.001$) が有意であった。つまり、魅力の無い相手に対しては、魅力の有る相手よりも距離が遠くなり、かつ相手が異性の場合、同性よりも距離が遠かった。被験者の性の主効果については、やや傾向が見られ($F(1,63)=2.632, p<.109$)女性被験者が男性被験者よりも対人距離に近い傾向が伺えた (Fig.2 参照)。

【親密度の要因】

相手との親密度の要因を検討するため親友、恋人、大学生(同性)、大学生(異性)への対人距離スコアの平均値について被験者の性(男,女)×親密度(高,低)×相手の性(同性,異性)の3要因分散分析を行なった。親友、恋人は親密度が高く、大学生は親密度が低いものとした。その結果被験者の性($F(1,63)=7.002, p<.01$)、相手との親密度 ($F(1,63)=106.103, p<.001$)、相手の性 ($F(1,63)=8.646, p<.004$)の主効果が有意で、また被験者の性差と相手の性($F(1,63)=10.869, p<.001$)、親密度と相手の性($F(1,63)=29.104, p<.001$)、被験者の性×親密度×相手の性($F(1,63)=6.811, p<.011$)の交互作用が有意であった。単純・単純主効果の検定の結果、被験者の性差が親友・恋人・同性大学生においてみられ (各 $F(1,252)=7.941, p<.005$; $F(1,252)=4.475, p<.035$; $F(1,252)=13.135, p<.001$) たが、相手が異性の大学生ではみられなかった。

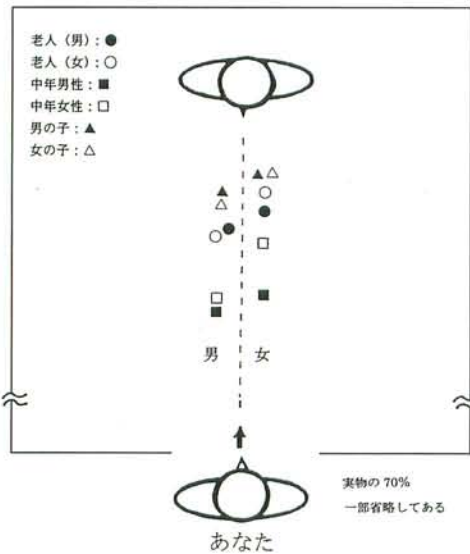


Fig. 1-1

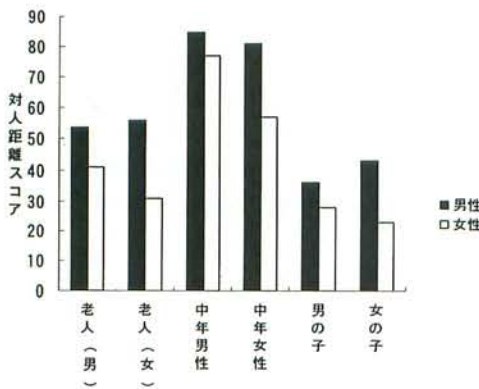


Fig. 1-2 年齢要因による対人距離スコアの平均値

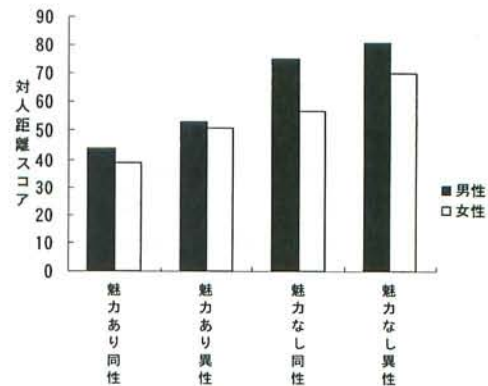


Fig. 2 魅力度の要因による対人距離スコアの平均値

また親密度による有意差は、男性被験者が同性の相手（親友<同性大学生）、異性の相手（恋人<異性の大学生）に対する時、女性被験者が同性の相手（親友<同性大学生）、異性の相手（恋人<異性大学生）に対する場面で現われ、両被験者群において親友・恋人との距離が一般大学生との距離よりも近かった（各 $F(1,126)=16.197$, $p<.001$; $F(1,126)=41.089$, $p<.001$; $F(1,126)=8.667$, $p<.003$; $F(1,126)=96.083$, $p<.001$ ）。

相手の性による差は女子被験者が親密度の低い相手に対する場面でのみ現われ（ $F(1,126)=16.197$, $p<.001$ ）、女子被験者は異性大学生に対する時は、同性大学生に対するよりも距離を遠くとした（Fig.3 参照）。

【身近な人との対人距離】

実生活における身近な人との対人距離について検討するため、父親、母親、恋人、親友への対人距離スコアを測定しその平均値について、被験者の性差(男,女)×身近な人（父親,母親,恋人,親友）の2要因分散分析を行なった。その結果、被験者の性($F(1,63)=15.244$, $p<.001$)と身近さ($F(3,189)=21.496$, $p<.001$)の主効果が有意であったが交互作用は有意ではなかった。つまり男性被験者は女性被験者よりも対人距離を遠くとした。両被験者群とも相手が父親の場合、恋人・親友・母親よりも距離が遠く（父親>恋人、親

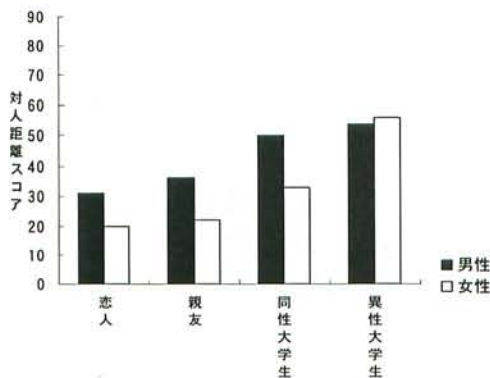


Fig. 3 親密度の要因による対人距離スコアの平均値

Table 1 男女別の 16 人物に対する対人距離スコアの平均値と標準偏差

	男性	女性
魅力あり同性	44.87 (22.42)	39.48 (14.83)
魅力あり異性	71.56(109.03)	51.75 (25.88)
魅力なし同性	78.87 (37.15)	57.78 (22.71)
魅力なし異性	81.68 (42.53)	70.30 (31.90)
親友	35.96 (20.23)	22.72 (7.94)
恋人	31.18 (22.52)	20.87 (10.07)
大学生同性	50.81 (23.16)	33.15 (14.09)
大学生異性	54.53 (24.30)	68.39 (70.46)
父親	55.56 (34.05)	37.87 (19.68)
母親	49.46 (26.22)	27.03 (19.11)
中年男性	85.71 (42.44)	77.81 (28.81)
中年女性	81.75 (40.04)	57.18 (17.45)
老人男	54.28 (30.18)	41.33 (20.66)
老人女	56.37 (28.74)	31.81 (17.76)
男の子	36.15 (17.42)	28.12 (17.43)
女の子	43.50 (23.02)	24.06 (11.89)

注：単位はmm（ ）は標準偏差

友、母親）、母親は恋人・親友よりも距離が遠かった（母親>恋人、親友）が、恋人と親友では有意差はみられなかった（Fig.4）。

【16 人物への対人距離の相対的順位】

男性被験者、女性被験者別に 16 人の異なった人物への対人距離の平均値と標準偏差を示した（Table 1）。16 人の相対的な順位を Table 2 に示した。男女とも 1 位は恋人、2 位は親友で、中年男性は最下位であった（Fig.5 参照）。

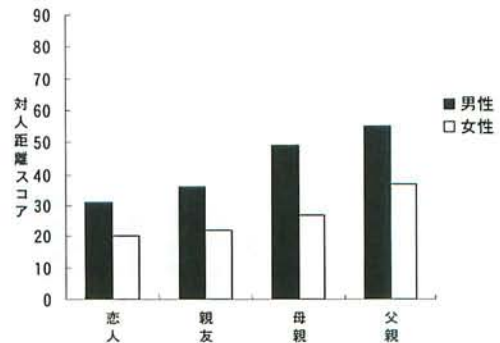


Fig. 4 身近な人に対する対人距離スコアの平均値

Table 2 男女別の16人物に対する相対的順位
(位置)

順位	男性	女性
1	恋人	恋人
2	親友	親友
3	男の子	女の子
4	女の子	母親
5	魅力あり同性	男の子
6	母親	老人(女)
7	同性の大学生	同性の大学生
8	老人(男)	父親
9	異性大学生	魅力あり同性
10	父親	老人(男)
11	老人(女)	魅力あり異性
12	魅力あり異性	中年女性
13	魅力なし同性	魅力なし同性
14	魅力なし異性	異性の大学生
15	中年女性	魅力なし異性
16	中年男性	中年男性

16人物に対する全体的傾向をみるため各々の対人距離スコアの平均値について、ここであえて被験者の性(男,女)×対象人物(16人物)の2要因分散分析を行なった。その結果被験者の性(F(1,63)=9.251,p<.003)、対象人物(F(15,945)=22.537,p<.001)の主効果、被験者の性と対象人物との交互作用(F(15,945)=1.704,p<.05)が有意であった。単純主効果の検定の結果、魅力あり異性、魅力なし同性、同性の大学生、父親、母親、中年女性、老人女性、女の子どもに対しては、女性被験者の対人距離は男性被験者よりも近

かった(P<.05)。また男性被験者も女性被験者も16人物への対人距離に差がみられた。

男性被験者では Ryan 法による多重比較の結果、恋人、親友、男の子、女の子、魅力あり同性、母親、同性大学生、老人(男)、異性大学生、父親、老人(女)は、魅力あり異性、魅力なし同性、魅力なし異性、中年女性、中年男性よりも距離が近かった。女性被験者においては、恋人、親友、女の子、母親、男の子、老人(女)、同性大学生、父親、魅力あり同性、老人(男)は異性大学生、魅力なし異性、中年男性より距離が近かった。恋人、親友、女の子、母親、男の子、老人女、同性大学生は、魅力なし同性より距離が近かった。恋人、親友、女の子、母親、男の子、老人(女)、同性大学生は、魅力なし同性や中年女性よりも距離が近かった。恋人、親友、女の子、母親、男の子は、魅力あり異性よりも距離が近かった(P<.05)。

また全体的に、男女とも恋人と親友、中年男性などをのぞくと、同じ条件(同年齢、同魅力度、同親密度など)なら、相手が異性より同性の方が距離に近い傾向であった。

考 察

【被験者の性の要因について】

対人距離の性差について、対人距離スコアの平均値は、全体的に男性よりも女性のほうが小さかった。したがって、女性は男性よりも対人距離を小さくするという従来の研究結果を支持

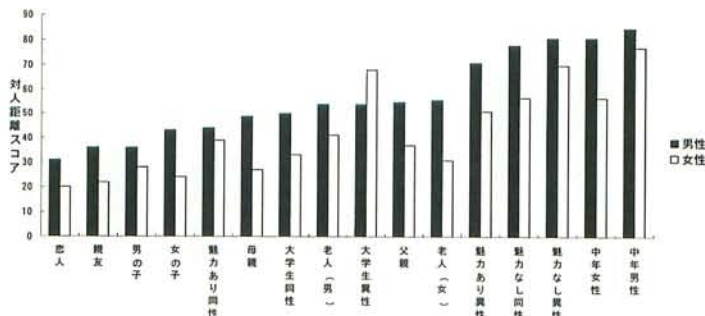


Fig. 5 16人物に対する対人距離スコアの平均値

するものといえる。

【相手の年齢の要因について】

男性も女性も、対人距離はほぼ中年>老人>子どもの順に小さくなり、その中でも中年と老人・子どもとの差はかなり大きかった。大学生にとって中年は最も距離を置きたい相手であり特に中年男性に対する距離は男女共に16人物の中で最も大きい。老人や子どもは社会的に弱い立場にあり、中年は社会の中心的役割を担っている世代とも言え、一種の地位の差がこの結果をもたらしたと考えられる。本研究は、同等の地位の人とは距離を小さくとり、自分より高い地位にある人とは距離を大きくとるという従来の研究結果(Dean, Willis & Hewitt, 1975)を支持する方向を示唆した。

相手の性に関して、男性被験者は、年齢に関わらず相手が男であろうと女であろうと距離に差は現われなかった。つまり男性は、老人、中年、子どもに対して、相手が男・女という意識をもたずに接していることが伺える。一方女性は、老人、子どもに対する性差は無いが、中年に対しては性差があり、中年男性により大きな距離をとった。また女性被験者は、中年と子ども間の大学生、つまり被験者と同年代の人物に対しても性別による違いが見られ、異性に対してより大きな距離をとっている。女性は恋愛の相手として、同年齢もしくは年上の相手を選ぶことが多いとされており(伊藤, 2000)、そのことも大学生や中年に対して性を意識させ、対人距離に反映されることが示唆された。

【魅力度の要因について】

男性も女性も、魅力的でない人より魅力的な人への対人距離が小さいことが示され、魅力度の要因が対人距離に影響すると結果が示され仮説は支持された。また魅力あり・なし各々の場合に、異性より同性への距離が小さかった。

本研究では、単に魅力的な人と魅力的でない人とに分けたが、他者に対する魅力や好意が形成されるには様々な条件があるとされており、人格の特徴、身体的特徴、類似性、熟知性、近

接性などが知られている。したがって、各被験者によって、他者の何に魅力を感じるかは異なっている。今回はその点を統制していないため一般的に魅力的な人といってもその魅力が何に起因しているのかは不問であった。今後魅力を内面的な魅力、外見的な魅力などの次元に分けてさらに分析することが待たれている。

【親密度の要因について】

本研究では、相手との親密度が高い程、対人距離は小さくなるという結果であり、先行研究を支持したといえる。男性被験者は、親密度が高い相手にも低い相手にも同性・異性で差はないが、女性被験者は親密度が低い大学生への対人距離は同性・異性によって差がみられ、異性の大学生に対する距離が大きかった。ここでも、女性は同性との距離を小さくとり、異性との距離を大きくとるという結果であった。女性の場合、同性に対する親密度の違いによる対人距離の差より、異性に対する親密度の違いによる対人距離の差の方が大きく、女性は相手の男性を自分と親しいか親しくないかで極端に二分していることが示唆された。

【身近な人について】

全体的に女性は男性より対人距離が小さかった。男性は、父母との距離が大きく、親友と恋人への対人距離は小さい。女性は父親への対人距離が大きく、母親・恋人・親友への対人距離は小さかった。つまり、男性の主要な人間関係は家族よりも、恋人や親友といった友人関係であるといえる。親からの心理的離乳、自立が青年期の発達課題の一つとされるが、男性の場合家族との距離の大きさにこのことが現われたと考えられる。女性は、恋人・親友・母親で一つのグループを形成し、父親とは距離が離れていることが示された。女性は、男性より母親との距離を小さくとっていた。これは娘と母親との情緒的結びつきが強いことを示唆している。青年期の自立に際して、男女の母親との距離のとり方の違いが示唆された。

【16人物に対する相対的な順位について】

男性女性ともに1位は恋人であった。青年期は、同性の友人関係から異性へと関心が移行する時期で、恋愛を通して自己のアイデンティティを形成するともいわれている。本研究の対人距離テストでも、男女とも恋人との距離が最も小さく、大学生にとって恋人が重要な存在であることが示唆された。また親友に対しても恋人とほぼ同じ距離が示された。青年期以前の対人関係は同性の友人が中心であるが、青年期に入り異性が登場し始めるようになり、青年期以降は恋人と親友の距離の差は広がっていくことが推察される。

身近な母親について、女性は3番目に近い距離に置いているが、男性は6番目に置いた。今川(1993)によれば、小学3年生・小学6年生・中学3年生において、すべて娘と父親・母親の方が、息子と父親・母親との距離よりも近く、娘と母親の距離は最も近かった。今川ら(2000)は従来の伝統的な性役割によるしつけでは、男児には独立的、女兒には優しく親和的であることが期待され、したがって男性は年齢が上がるにつれ母親との距離をとる(順位が下がる)が、一方、女性は年齢が上がっても母親との距離は遠ざからないことを示唆した。本研究での大学生の対人距離テストの結果は、今川の研究を支持するものといえる。

全体的考察

これまで対人距離に関する様々な研究がなされてきたが、対人距離の性差に関する結論は一致していない。被験者の性、相手の性、どちらが影響しているのかは研究により異なるが、被験者の性より相手の性が有意な影響を及ぼしているとするものが多い。本研究では、16人物に対する被験者の性の主効果が見られ、女性の方が対人距離は近いという結果であった。つまり被験者の性の要因は、対人距離を規定することが示された。また相手の性が対人距離に関係している可能性も示唆された。男性は相手の特性(年齢、魅力、親密度)に関わらず、同性・異

性の差がなかったが、女性は特性により相手の性が対人距離に影響を与えた。女性は中年男性や親密度が低い異性には距離を遠くし、また魅力の要因よりも相手の性(同性か異性か)が対人距離の決め手になった。このように本研究では女性の方が対人距離は小さいという性差がみられ、特に女性の場合は相手の性によって対人距離を変化させていることが見出された。

また本研究では特に女性の場合に同性より異性に対して対人距離が大きいとの結果が示されたが、従来の欧米の研究とは異なっていた。欧米の研究では、同性間の距離よりも異性間の距離のほうが小さいとの結果が示されてきた。これは文化の違いによるものと考えられるが、今後この点について比較文化的な観点からさらなる検討が待たれている。

対人距離に関する数多くの研究は大半が欧米のものであり、日本人の対人距離を分析したものは多くないとされている。Hall(1966)は人間の空間行動が、それぞれの社会に住む人々の生活習慣・欲求を反映するものであるとし、文化的要因を重視した。今後、日本人の特有の対人距離あるいは個人空間を規定する要因についてさらなる分析が待たれている。

要約

本研究の目的は、対人距離に及ぼす要因を検討することである。対人距離を規定する要因は様々であるが、本研究では被験者の性、相手の年齢・親密度・魅力・性の要因に焦点を当てて要因分析を行なった。

大学生65名を対象に、対人距離テスト(北川)を行なった。対人距離テストとはシミュレーション場面における対象人物への対人距離を測定するもので、紙に被験者自身ともう一人の人物が描かれており、その人物と会話する時に最も適当だと思ふ距離に○印を付けてもらい、その距離を対人距離とした。対象人物は16人設定した。

その結果、被験者の要因については女性は男

性よりも対人距離は小さいことが見出された。また相手の性も影響しており、男性は相手が同性・異性で対人距離に差はみられないが、女性は相手が同性・異性で差が見られ、同性のほうが距離を小さくする。年齢の要因については、男女とも対人距離がほぼ子ども<老人<中年の順となり、特に中年男性との距離が遠かった。魅力の要因については、男女とも魅力的でない人より魅力的な人との距離が近かった。しかし女性は魅力の要因よりも相手が同性か異性かを重視しているようである。親密度の要因については、親密度が高い程対人距離は小さかった。特に女性は親密度が高い場合には性差が生じないが、親密度が低い場合に性差があり異性に対してより大きな距離をとった。また男女とも、最も距離が小さいのは恋人・親友であり、被験者が大学生であることから、この時期の対人関係において恋人・親友が主要な人物であることは当然といえる。女性は男性よりも母親との距離を小さくしており、母親と娘との結びつきが強いことがわかった。本研究では対人距離の性差について、女性の距離のとり方が特徴的であった。

引用文献

- 青野篤子 1979 対人距離に関する発達の研究 教育心理学研究,19(2),97-105.
- 青野篤子 1981 個人空間に及ぼす性と支配性の影響 心理学研究,52(2)124-12.
- 青野篤子 2003 対人距離の性差に関する研究の展望 - 従属仮説の観点から - 実験社会心理学研究,42(2),201-218.
- 青野篤子 2003 対人距離に及ぼす性と地位の影響: 従属仮説の観点から 社会心理学研究,19(1),51-58.
- Daves,W.E.,& Swaffer,P.W.1971 Effect of room size on critical interpersonal distance.Perceptual and Motor Skills, 33,926. (青野,2003より)。
- Dean,L.M.,Willis,F.N.,& Hewitt,J 1975 Initial interaction distance among individuals equal and unequal in military rank.Journal of Personality and Social Psychology, 32(2), 294-299.(青野,2003より)
- Dosey, M. A. & Meisels, M.1969 Personal space and self protection.Journal of Personality and Social Psychology, 11(2), 93-97. (青野,2003より)
- Dykman,b.M., & Reis,H.T.1979 Personality correlates of classroom seating position Journal of Educational Psychology,71,346-354.(北川,1998より)
- Gifford,R.1982 Projected interpersonal distance and orientation choices:Personality,sex,and social situation. Social Psy. Quarterly,45(3)145-152.(青野,2003より)
- Gifford,R.1997 Personal space.In R.Gifford Environmental Psychology(2nd ed.)pp95-117 Boston:Allyn & Bacon. (青野, 2003より)
- Hall, E. T. 1966 The hidden dimension. Garden city, NJ:Doubleday Anchor. [日高敏隆・佐藤 信行訳 1970 かくれた次元 みすず書房]
- Hartnett,J.J.,Bailey,K.G.,& Gibson,F.W.Jr. 1970 Personal space as influenced by sex and type of movement.The Journal of Psy. 76,139-144. (青野,2003より)
- Hayduk,L.A.1978 Personal space:An evaluative and orienting overview. Psychological Bulletin, 85(1), 117-134. (青野, 2003より)
- Hayduk,L.A.1983 Personal space : Where we now stand. Psychological Bulletin,94(2),293-335.
- 藤原武弘 1986 パーソナル・スペースに表れた心理的距離についての研究 広島大学総合科学部紀要 III,10,83-92.
- 今川峰子 1993 パーソナル・スペースに影響する年齢・親密性・居住地域の分析 聖徳学園女子短期大学紀要 21,1-17.
- 今川峰子・譲西賢・斎藤善弘 2000 中年者及び高齢者の家族メンバーに対するパーソナル・スペースの検討 発達心理学研究,11(3),212-222.
- 伊藤裕子 2000 ジェンダーの発達心理学 ミネルヴァ書房
- 北川歳昭 1998 教室の座席行動と個人空間-教師への距離の調整としての学生の着席位置-実験社会心理学研究,38(2),125-135.
- Little,K.B. 1965 Personal space. J.of Exp. Social Psy. 1, 237-247. (青野,2003より)
- Severy,L.J.,Forsyth,D.R.,& Wagner, P. J. 1979 A multimethod assessment of personal space development in female and male, black and white children.Journal of Non-verbal Behavior, 4(2), 68-86.(青野,2003より)

渋谷昌三 1976 社会空間の基礎的研究 心理学研究,47(3),119-128.

渋谷昌三 1987 対人距離の発達的变化に関する投影的研究 山梨医科大学紀要,4,52-61.

渋谷昌三 1990 人と人との快適距離—パーソナルスペースとは何か—日本放送出版協会

Sommer,R.1959 Studies in personal space. Sociometry, 22, 224-260. (青野,2003 より)

Sommer,R.1965 Further studies in personal space. Sociometry, 28, 337-348. (青野,2003 より)

田中政子 1973 Personal space の異方性について 教育心理学研究,21(4),223-232.

Worchel, S. 1986 The influences of contextual variables on interpersonal spacing. J of Nonverbal Behavior, 10(4), 230-254. (青野,2003 より)